

第五十四回中央教化研究会議 基調講演

現代日本仏教におけるジェンダー平等

西永 亜紀子

西永 皆様、はじめまして。ただいまご紹介にあずかりました、SDGs おてらネットワーク代表で、浄土真宗本願寺派僧侶の西永亜紀子と申します。先ほどの基調講演で枝木先生から「SDGsとは何か」というところについて基本的なところを詳細にお示しいただいたので、私はタイトルの「現代日本仏教におけるジェンダー平等」とありまじょうように、仏教界におけるジェンダーの問題に特化して、自分の経験からですね、自分の経験に基づいて、思うところをお話ししていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

ちなみにですね、先ほど枝木先生もご紹介されていましたが、『私たちの如是我聞』という冊子、私も読みました。ジェンダーについて考える上で本当に素晴らしい一冊だと思ひますので、よかつたら、どこで手に入るのか、私は頂いたので分からないんですけども、読まれたらよろしいかと思ひます。

では、ちよつと本題に入る前に、少しかだけ簡単な自己紹介をさせていただきます。私は、和歌山市の浄土真宗本願寺派寺院の次女として生まれました。二十歳で得度しましたので、現在は浄土真宗本願寺派の僧侶です。学校を出ましてから、しばらく一般の企業で勤めておりました。ドコモショップとか、旅行会社などで勤めておりました、そのあと、学生の頃にあまりにも仏教の勉強をしなかつたもので、ちよつと焦りまして、中央仏教学院とい

う、京都にあります浄土真宗本願寺派が運営する僧侶の養成学校みたいな所ですね。中央仏教学院を出ましてから、築地本願寺に入職いたします。このときは二年間ぐらいだったんですけども、結婚することが決まりました、築地本願寺は退職して、大分の本願寺派の寺院に夫婦で入寺します。その後、入寺先を出て本願寺の九州地方の別院に行き、この別院のあと、離婚しています。離婚して、二〇二〇年四月から、また築地本願寺に復職したという形になります。

そして二〇一八年に先ほど申し上げたSDGsおてらネットワークというものを設立して、代表を務めております。このSDGsおてらネットワークというのは、宗派の垣根を越えて、仏教の教えを通してSDGsを推進していくということ、私が当時、「未来の住職塾」というところに通っておりまして、その同期生たちと一緒に立ち上げた団体です。あと、先ほど司会の方からご紹介がありましたように、全日本仏教会の国際交流審議会の委員をさせていただいております。また准認定フアンドレイザーという資格も、最近取りました。これは、NPOなどの資金調達に関わる資格でございます。簡単に自己紹介させていただきました。

それで、私がですね、今、五十歳なんですけれども、自分の人生を振り返ってみまして、仏教界のジェンダー問題について関心を持ち始めたのは、九州で坊守をしていた頃かと思えます。ちなみに坊守というのは、今日ご参加の皆様はもうご存じかと思いますが、浄土真宗本願寺派では、住職の妻、配偶者のことを坊守と呼ぶんですけれども、宗門法規上の位置づけでは、住職の配偶者もしくは住職の家族で、住職と共に寺院の運営をする立場の人のことなんです。つまり本来の意味から言うと、坊守というのは女性だけではありません。住職が女性だったら、男性の坊守がいてもいいということになっています。

その九州で坊守をしていた頃というのは、自身が感じている違和感といえますか、納得が行かない慣習みたいなものにどう向き合っていけばよいか分からず、毎日息苦しさを感じていました。でも、そういう気持ちを口に出して

はいけないような、何かそういう空気感といいますか、雰囲気、そこにはあったわけです。そういう苦しい気持ちを抱えながら、当時の私は、こういう気持ち、こういうモヤモヤを持ってしまっているのは、きっと私が我が儘だからだとか、他の坊守さんは不平不満を言わず、何なら楽しそうにやっているように見えるのに、何で私だけモヤモヤしながら坊守をしているんだろう。「私の感覚、おかしいのかな」とか、自分を責めてばかりいました。最終的にですね、「何のためにこんなことをしているのだろう」とか、自分の存在意義というのが分からなくなってしまうというところから、ジェンダーであったり、お寺の中の女性ということについて、考えるようになってきたのではないかと思っています。

私が結婚したのは、今から二十二年前のことです。結婚した当時というのは、いわゆる普通のいい奥さんになるうとしていました。そうすることが女性の幸せなんだと、ほんとに信じていました。当時の女性の価値観から言うところごくごく普通であったと思います。時代的にも、二十二年前といえば、結婚イコール女性の幸せ、結婚イコールゴールみたいな、そういう価値観があったと思います。私もご多分に漏れず、二十八歳の時に、「早く結婚しないと」とか、子供が欲しければ三十歳までに結婚しないと、とか焦った気持ちもあって結婚したわけですけども、私の結婚というのは、ちょっと複雑でした。

どういうふうな複雑だったかというと、結婚した夫の遠縁に当たる、子供さんのいらっしやらないご夫婦、要するに、後継者のいない住職夫妻との養子縁組。結婚と同時に養子縁組をして、そのお寺に入寺するという形でした。そういうわけで結婚したと同時に、名前、姓ですね。姓が、夫の姓でもない、私の生まれ持った西永という姓でもない、養子縁組をした義理の父母、養父母の姓に結婚と同時にになりました。

複雑と言えましょう一つ、私には全く縁のなかつた九州の山間部にあるお寺の若坊守になったという、そういうことも、私にとっては初めての体験でした。お寺の出身ではあったのですが、町中の和歌山のお寺と、九州の山間部にあ

るお寺とでは、慣習であったり、文化が全然違っていましたので、そういうところに慣れていくのも大変だったかなと思います。

それで、結婚してすぐに感じたのが、最初に申し上げた名前の問題ですね。結婚前は自分の姓が変わることについて、深く考えたことはありませんでした。ですが、婚姻届を出した後、急にですね、「ああ、もう西永亜紀子って、どこにもいないんだ」という、えも言われぬ喪失感が襲ってきて、すごく辛くて、結婚した新婚当初から暗い顔していたのをはつきりと覚えています。その「こういう気持ちになったんだ」ということを当時の夫に話したわけですが、それは夫には理解してもらえませんでした。今から考えると、時代的に無理もないことかなと思います。

今でしたらね、選択的夫婦別姓の法制化ということでしきりに議論されていますので、多くの女性が結婚と同時に姓を変えなければいけない状況になって、それによってしんどい思いをしている人がいるなんてことは、世の中に知られてきましたけれども、二十二年前は、まさか私と同じようにそんな気持ちの人がこんなにたくさんいたなんて、ほんとうに思ってもいませんでしたし、そんなことを知るすべがありませんでした。本人ですらそんな感じでしたので、夫は更に分からなかったと思います。

そういう経験から私が今思うことは、結婚という仕組みは必ずしも女性の幸せと直結しているわけではありませんし、もちろんそれは女性だけでなく、男性にも言えることなんですけれども、今の時代に生きる人たちのライフスタイルに合っていない部分があるのではないかと感じています。要は時代はどんどん変わってきていて、人々の価値観も変わってきていますよね。ところが結婚という仕組みは、なかなかアップデートできないでいる、そして、それによって立場の弱い人が苦しんでいるということです。

そう考えてみると、インターネットの登場というのは、弱い立場の人たちの小さな声を可視化してくれたので、私の生き方を変える大きなきっかけを作ってくれるようになったと思います。九州のお寺に入寺していた当時は、まだ

インターネットのない時代でしたので、自分の考えが特殊なのか、間違っているのか、おかしいのかと責めるよりほかなかったのですが、時代は流れてインターネットが普及して、同じような立場の人の意見がすぐ見ることができるようになって、自分と同じような立場の若い坊守さんたちも、実は同じような悩みを抱えているっていうことが分かってきたんですね。そして、これではいけないのではないか、何か自分にできることはないだろうかと思ひ始めたようにその頃、たまたま友人がSDGsについて書いているブログを見つけました。それを読んでみると、そこに「ジェンダー平等を達成しよう」という目標があるのを知って、「あ、これだ」と思ったわけです。

先ほどお話しした大分の入寺先ですが、そこはいろいろ事情がありまして、四年ほどそこにいたんですね、養子縁組を解消してお寺を出ることになって、その後夫婦である九州の地方に移ることになりました。どうしてかというところ、たまたま九州地方の別院の宗務員、職員ですね。職員に空きがあつて、そこに夫が宗務員としてお仕事をさせていただけるということになったから、その地方に行くことになったんですね。夫は、そういうふうには別院の職員になりましたが、私は職員ではなく、職員の妻、家族という立場でした。

そしてその別院には、独自のルールというか、システムというか、やり方があるんですね。そこに市内に二十二か所、出張所というものがあつます。一つ一つは、普通のお寺ですね。出張所なので「所長」と呼ばれていたんですね。けれども、所長がいてお寺という住職の仕事をする、坊守がいて、門徒さん、檀家さんがいて、所長は門徒さん、檀家さんのお参りに行って、坊守はお寺の奥さんの仕事をするという形で、一般のお寺と全然変わりないんですが、一つ大きく違うところといえば、所長が別院職員であるということです。

ですので、別院から辞令が出れば、ここの出張所を替わっていくんです。三年から五年ぐらいのスパンで、いろいろな出張所にぐるぐる回っていくんですね。私も十六年間いましたけれども、最初は紫原出張所に行って、その次に吉野出張所に行って、武出張所に行って、最後、伊敷出張所と四か所回りました。こういうふうには、少し変わった運営

のやり方をしています。

それで、出張所のシステムというのはそういう感じなんですけれども、職員の手配、所長の妻が坊守と呼ばれて、留守番とか行事の準備、事務とか雑用を引き受け、一般寺院の坊守と同じようにお寺を守っていくんですけれども、これは、妻である私たちに別院から説明がちゃんとならない状態で、着任したら突然「坊守さん」と呼ばれて、坊守会というところに知らないうちに入っていて、その日から坊守さんになっているという状態なんです。坊守をしたいか、したくないかということの拒否権はありません。それと、坊守手当として月数万円、別院からお手当が振り込まれるわけですが、これも拒否権はありません。拒否できないっていうのはどうということかと、今まで続いていた仕事ができないということですね。仕事を辞めなければいけないということなんです。要するに、「私、坊守手当は要らないので、仕事を続けます」ということができないんです。

そこに行つた当初は、「そういうルールなんだね」ぐらいにしか思いませんでした。なぜかといいますと、私は結婚したと同時に仕事を辞めましたし、そのときは結婚したら女性は仕事を辞めるのが当たり前だと思込んでいましたので、それについて違和感を感じなかったわけです。でも、後々、別院と私は何の雇用関係もないのに、私たち職員の家族が別院から仕事を辞めるように言われるのは、おかしいのではないかと考えるようになってきました。

それは、時代が変わってきたからというところもありますね。結婚しても女性が仕事を続けるのが当たり前な時代になってきたから、私もそういうところから少しずつ疑問を持つようになってきました。よくよく自分のことも考えてみると、私も何となく結婚した後、坊守に自動的になってしまうただけで、本当は社会に出て、一人の社会人として社会に貢献する仕事をやりたかったし、経済的に自立もしたかったんです。しかも、それができなくなってしまったということなんです。

それで、あるとき勇気を出して、別院の方にですね、「坊守手当をお断りして、外で仕事をしたいんですけど、い

いですか」って聞いてみたんですが、「だめです」と簡単に断られました。その理由を聞くと、「出張所が回らなくなるでしょう」ということでした。こんなことは、多分、一般の社会じゃ通用しないことだと思います。例えば、一般の会社のサラリーマンの奥さんを、「手当を出すから、今の仕事を辞めてうちの会社手伝って」とか、「手伝ってもらうことを拒否することはできませんよ」みたいな。「でも、あなたは社員じゃないから、社会保障も何の保障もないですよ」みたいな、そういう形で手当を与えて働かせたら、やっぱりそれっておかしいと思いますよね。でも、お寺の世界ではこれが通用しています。

社会的にも、男性のお坊さんと結婚したのだから、女性はお寺に入って夫を支える。夫を支えるのが当たり前という感覚が、まだまだ残っていると思います。そういう感覚的なところも問題であると思っています。

この話って、何十年も前の話ではなく、今の話なんですよね。現代の話。それで、これではいけないのではないかとって、お寺の中のジェンダーギャップについて、個人的にいろいろと発信するようになりました。黙っていたら、ずっと続いてしまう。誰かが「おかしいんじゃないの」っていう声を上げないといけない。でも、若い人たちは、これがおかしいっていうことに気づきだした人もいましたが、それでも誰も言いたさくないですね。

それはなぜかというところを考えたくても、坊守会に入った人は、仕事もできず、出張所の仕事、あとは別院行事のお手伝いと、それだけで忙しくしていますので、居場所が限定され、出張所であったり、別院の中だけで、何とかみんないい坊守さんになろうと必死になります。そこで輝くしかないからですね。そこでこういう言葉を使うと語弊があるかもしれませんが、カルト化してしまうといえますか、みんな同じ方向を向いてしまうということになります。

どうすれば自分が献身的でよい坊守さんになれるのかということ、その一点を真剣に考えるようになって、例えば坊守会の研修会では、一番年長の坊守さんが講師になって、若い坊守さんに「坊守とは、こういうものですよ」っ

ていうのを教えたり、あるいは、それ以外の研修といえは、お茶の入れ方講座であったり、マナー講師の方をお招きして、マナー講座ですね。箸の上げ下げから教えていただくとか、あるいは浴衣の着付け講座とか、お花の生け方とか、そういうところを学んでいく研修ばかりになっていました。

当時の私は、実はそこにあまり興味が向かなくて、勉強するのであれば、エクセルの使い方とか、パワーポイントを上手に使う方法とか、簿記の勉強等の方に興味がありました。簿記の知識が全くなかったのです、簿記の勉強をしたくなって思っていたのですが、あまりそちらに興味のある人もいなかったということもありますし、そういう意見が通りそうにもなかったのです、「そういう勉強がしたいです」と言うこともなく、陰で密かに自腹でパソコン教室に通っていました。

そうして、集団の中ではりっぱな坊守さんっていうのが育成されていくのですが、そういう坊守会を見ていて、私は途中から段々怖くなってきたんですね。入ったばかりの若い坊守さんっていうのは、年配のベテラン坊守さんを見て、「こんなにりっぱな坊守さんばかりいられて、私は同じようなことできない。私は今までやってきた仕事を続けたい」と最初は言っているんですけども、その方たちが五、六年たつと、みんな楽しそうに坊守会に出席するようになっていって、またあと二、三年たつと、そのあとはついに若い人に、「あなたは坊守としてふさわしくないわよ。こういう服装しなさいよ」とか、「ふるまいはこうしなさいよ」とかいうふうには、いわゆるりっぱな坊守さんになっていくわけです。

そうやって坊守会の中では一生懸命輝いていくわけですけども、ふとしたときに、実は社会から取り残されているのではないかと感じました。みんな頑張るベクトルが同じ方向で、少し違う方向に向く人がいると、そういう人たちに対して批判的になってしまいがちです。特に、女性が人の前に立つような立場になったり、あるいは自分の夫、所長さんより前になるようなことになる、いろいろなところから批判されたりします。頑張る方向が一定の方向し

か許されないような空気がそこで醸成されていました。

それとですね、怖かったというのは、それに加えて、経済的に自立するすべを取り上げられたというと厳しい言い方かもしれませんが、経済的に自立することなく年齢を重ねてきてしまったということもあります。これは私の場合なんですけれども、実は早い段階で離婚ということを考えてはいたんですけれども、それもほとんど無理な状態でした。というのは、最初に説明しましたけれども、離婚したところで何の保障もありません。失業手当とかもありませんし、住む所ありませんし、ただの仕事がない人で、なおかつ社会人として必要とされるスキルもちゃんと身につけていない状態です。そういう状態では、おいそれと離婚もできません。そう考えていくと本当に怖くなりました。そして、それと同時に、理不尽だし、不平等だなということにも気づきました。

SDGsを知って、ジェンダー平等という言葉があることを知って、私はずっと心に抱えていたモヤモヤとしたものが言語化されて、それがネットで多くの人と共有できるような状態になったことで、自分の経験を話して、これを訴えていかないといけないという気持ちになりました。

私がいた別院の場合は、特別なルールがあってそういう不平等な状態が続いているというのもあるんですけれども、なぜ今、この令和の時代にまでジェンダー不平等が続いているのか、私なりに考えて、三つぐらいにまとめてみました。一つは、閉鎖的な環境に居続けることで、当事者が「おかしい」と思っても声を上げづらかったり、おかしいとも気づかなくなるといったことがあります。二つ目は、重要な意思決定の場に女性がいないということですね。これは、組というブロックであったり、教区であったり、宗派であったり、どういう組織においても、女性が本場に少ないなと思います。三つ目にこれは仏教界に限らず、まだまだ日本全体でそういうところがあると思うんですけれども、まずいことを隠そうとする体質ですね。これがあると思います。

先ほどお話しした別院での話は、当たり前なんですけれども、坊守たち自身の問題でも、また、別院職員が悪いわ

けでもなく、ジェンダー不平等な構造が常態化している教区の問題であったり、宗派の問題であったり、もっと広い目で見れば、日本の構造的な問題であったりだと思っています。多分、宗派の上層部の方たちは、九州地方の別院の坊守さんたちがまさかそんな思いをして暮らしているなんてことはご存じないと思いますし、例えば、その話を宗派の上層部の方にする機会を与えていただいたとしても、そのことに対してどれだけの方が共感して、本気で改革しようとしてくれるだろうか、私は少し心配です。

先ほど、まずいことを隠そうとする体質っていう話をしたんですけども、実は宗派内のある所に九州のある地方でのジェンダーギャップにまつわるエピソードを依頼されて書いたことがあるのですが、世の中に出る前にある所からNGが出て、結局、本質が伝わらないくらいマイルドな表現に書き直して出したことがあります。それも、一回ではなく数回あります。結局、私もこういうふうに言ってますけれども、何だかんだ言って、どこかに忖度して自分の言いたいこともちゃんと書かなかったという自分の不甲斐なさを思うと、嫌になるんですけども、それでもこうしておかしいことは「おかしんじゃない？」って言い続けないと、いつまでもこういう前時代的な、女性は安くて便利な労働力みたいな感じで使われていく状態は、変わらないのではないかと思います。

本日は日蓮宗様の研修会ということで、他宗の事情を私はよく分かっているわけではないので、軽々しいことは言えないと思います。やはり仏教のどの宗派も、男性中心に物事が決められてきたのではないかと思います。男性ばかりで女性の問題を論じてても、当事者不在で、本質的な解決には至らないのではないかと思います。ですが、そんな中でも日蓮宗さんは、こうして積極的に研修会を開いて私のような当事者の意見を聞いてくださって、ジェンダーの問題に取り組もうとされていて、本当に心強いなど、今、思っています。

正直言いますと、うちの浄土真宗本願寺派では、貧困問題であるとか、LGBTQの問題とかには少しずつ取り組んでいます。ジェンダー平等についてフォーカスして取り組むということは、私の知る限りではそういう研修会も

行われていませんし、あまりそこには力を入れていないような感じがしています。仏教界のジェンダー問題というのは、坊守自身も、宗派も、そして、日本人のジェンダーに対する価値観が変わらなければ、結局は解決しない問題だと思います。

私の所属する浄土真宗の教えというのは、阿弥陀如来による分け隔てない救いであったり、宗祖が自らのことを「僧にあらず、俗にあらず」とおっしゃったように、立場の違いで差別することをよしとしない教義のはずなのに、内実を見てみると、やっぱりこのようにあからさまな差別体質というのがいまだに温存されているので、このままでいいのだろうか、本当に思っています。

そういう思いからいろいろなところでこうして発信しているんですが、宗派の教義とSDGsの親和性みたいなところをお話しすると、必ず反発される方がいらっしやいます。私のところにも、そういう抗議というか、ご批判をいただたくことがよくあります。例えば、数か月前なんですけれども、私の職場の方にある男性から、「SDGsの代表をしてる西永という人がそっちにいますかと思っただけなんですけれども、話したい」ということで電話が入ったので、お話を聞いてみると、質問ではなく、SDGsと仏教に親和性があるとは何事かというようなお怒りというか、ご批判を一方的に三十分ほど聞かされて終わったという感じなんですけれども、うちの教義は絶対他力の教えなのに、SDGsというのはい人一人がいろいろなところに気づいてアクションを起こしていくという、その方がおっしゃるには自力である。自分から活動するから自力、自力であるSDGsと浄土真宗の教義を、親和性があるのか、そういうふうに言っただけじゃないという主張でした。それはよく言われるんですけども、浄土真宗の教義と、社会をよくするためのツール、道具であるSDGsをごっちゃにして考えてしまうと、そんなことになるのだなど、それはそれで勉強になりました。

多分、その方は、声の感じから高齢の男性だと思えますが、それぐらいしか分からなかったのはご自分の素性を一

切明かさなかったからでもあります。そういう方からご意見を賜ることはいろいろ勉強になるんですけども、その間、間で時々、「あなたは勉強不足だから分らないだろうけど」みたいな、「浄土真宗の御教えというのはこうなんだよ」っていう、今風に言うとお上から目線といいますか、そういうふうな言い方で持論を一方的に話されていたので、最近私も覚えたというか、よく聞く言葉なんですけれども、「マンスプレイング」という言葉がありまして、そういうことなんだなと思いつながりました。

マンスプレイングっていうのは、お寺にいますと、ほんとにしよっちゅうされます。女性の方は共感していただける方が多いかと思うんですけども、聞いてもないのにアドバイスをしてきたり、ご自分の知識をずっと長い間話されたりという方が、特に男性から女性にという場合が多いんですね。これはどうしてかというところ、マンスプレイングというのを調べると、女性は無知で愚かな存在であってほしいという、差別的な思い込みから来る行動だということなんです。その話しているご本人にしたら、無意識の思い込みなので、ご本人に悪気がないことが多いです。むしろ、よいアドバイスをしてあげたとか、いいことをアドバイスしたのだから、相手は感謝するはずだと思いつていることが多いと思います。

でも、実は、そういう不必要なアドバイスですね。特に上から目線でアドバイスをされるなんてことは、聞かされている方はやっぱりしんどいですし、迷惑でしかありません。大抵、立場の弱い人だったり、若い人、女性が多いので、反論できずに黙ってしまつて、しかも、立场上ですね、嫌な顔もせず「ありがとうございます」みたいに感謝の言葉を言ってしまったりしますので、これは男性だけには限りませんが、求められてもいないアドバイスはするべきでないと思っています。

先ほども言いましたけれども、例えば、笑顔で「ありがとうございます」みたいな、「いいお話を聞きました」とかって言われても、立场上そう言うしかなかったのかもしれないし、本当は迷惑で嫌だったということが往々に

してありますので、このマンスプレイングという言葉と、求められていないアドバイスはしないということは、私も職場では圧倒的に若い人が多いので、そういう嫌な思いをさせないようにということは、心掛けていかなければいけないなと思っています。細かいところですけれども、ふだんの会話を気にかけることからでも、お寺の中のジェンダー平等への取り組みというのは、できるのではないかなと思っています。

最後に質問がある方はお受けしたいと思いますので、質問の時間を長く取った方がいいかなと思いますので少し早いですがこのあたりで終わりたいと思います。いろいろと自分の経験を通じて思うところをお話しさせていたいただんですけれども、一つ言えることは、宗派によって教義が違います。また、女性の生き方もさまざまです。ですから一概に、途中でお話した坊守業に専念する人たちを批判する意味でお話ししたわけではありません。坊守業を一所懸命している人は、それはそれで一所懸命、それに対して頑張っているわけですから、そこをただただ批判するわけではなく、あまりにも選択肢のない生き方を強いられているお寺の女性たちの現状をお伝えることで、ジェンダー平等を現代の仏教界が達成していくには、何をどう変えればいいのか。そして、現代を生きる人に必要としてもらえるお寺というのはどういう場所なんだろうかということの問題提起して、私はこの辺でお話を終わりたいと思います。よろしいでしょうか。じゃあ、何かご質問ある方、お受けいたします。

司会 西永先生、どうもありがとうございます。日蓮宗の寺庭婦人と坊守の方で同じ所と全く異なるところがあるということに少し驚きましたが、そういう意味では初めて聞くお話でした。質問時間を多めに取っていただきましたので、何かご質問のある方は、挙手をお願いいたします。声をかけていただいてもけっこうでございます。女性教師の会の方々、何かご質問ございませんでしょうか。

質問者① ありがとうございます。女性として宗門の中にとると、似たり寄ったりの話はたくさんありますし、坊守さんの場合はご住職の補佐は勿論、別々にお檀家さん回りをされたりしている方たちもいらつしやいます。日蓮宗では女性教師というか、僧侶になつてからでないとなかなか、免許の関係上、お経に回ることをあんまりしないので、ちよつとまた感じが違うとは思うんですけれども。私も若い時からなつたので、その頃は、本当に男性の社会の中に入つて、私は宮崎なので、九州の方がいっぱい聞いてらつしやるからあまり言いづらいですけれども、九州独特の男尊女卑的なのが結構強めの土地柄というのがあるので、そこに入つた時には、今思えばすごく嫌な思いというのもたくさんしました。

ただ宗門的には、だんだん女性の方に目を向けてくださつて、今回もこういう会をしていただいたので、すごく前に進んでいっている方ではないかなとは思っています。ほんとに身につまされるお話で、女性ならではの、男性の方には分かつていただけたかどうかというのがとても不安ですけれども、本当にありがとうございます。すみません、質問とかじゃないんですけれども。

西永 ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。ほんとにそうですね。マンスプレイングっていうのも、男女の間でもあるかもしれないんですけど、男性間で、年齢的な部分でやつてしまうことがありますよね。本願寺の中でもそうなつてしまわないようにという話がありましたけど、我々も反省しなきゃいけない点が多々あるなということを感じました。

あと、ある九州の地方でのお話、坊守さんの状況というのは、特に地域差というのはないんですか。例えば東京だつたらとか、大都市とか、そういうところでも同じような感じなんですか。

西永 私が先ほど説明した坊守の状況というのは、その教区だけのことです。他の教区のお寺さんは一般寺院しかありませんので、お寺の住職と坊守が話し合って、兼業してる方も多いですね。坊守さんが外で働いてる方もたくさんいらっしゃるし、特に東京は、全くお寺にノータッチの女性もいますし、住職さんだけで一人で回してるっていうこともございますし。かなり特殊な所ですので、私が説明したことが浄土真宗本願寺派の全体のやり方ではないということだけ、ご承知おきください。

司会 ではその九州の地方だけの例ということで受け止めておけばよろしいわけですね。

西永 そうですね。浄土真宗本願寺派の、その教区のみのお話しました。

司会 出張所があるっていう形は、そこに限ったことなんですか。

西永 はい、そうです。

司会 分かりました。ありがとうございました。次のご質問どうぞ。

質問者② 西永先生、本日は貴重なお話をお聞かせいただきまして、ありがとうございます。ご質問させていただきます。日蓮宗では法華経の中で、竜女という竜女の娘が男性の姿に変わって成仏したという話をもって、「女性も成仏できます」という話をよくするんですが、それに関しまして、女性は男性の体にならないと成仏できないの

かという疑問といえますか、そういう議論がされる場合もあります。それに対しまして、しっかりと勉強しておりますので、こういう質問は失礼だったら申し訳ないんですけども、極楽浄土で女性は男性として生まれるという点に関しまして、坊守をされてる女性ですとか、西永先生のようなお立場の方はどのようにご理解をされているのかというのを、この機会にお聞かせいただけましたら幸いです。よろしくお願いいたします。

西永 はい。ご質問ありがとうございます。浄土真宗本願寺派の中でも、女人往生のお話ですよね。同じように男性に変わってから往生するみたいなのは、そういう議論というのは昔からございまして、ただ、私の理解では、それは違うと思っています。というのは、阿弥陀如来の救いというのは、先ほども申し上げたように、分け隔てなく救われていくというところが一番大切なところであります。女性であるから、男性であるから、性別がどうであるからっていうのは、救いの条件には全く入っておりません。ですので、女性は女性のまま、男性は男性のまま浄土に生まれていくというのが、私の理解です。こちらでよろしいでしょうか。

質問者② どうもありがとうございました。

司会 はい、ありがとうございます。続きましてご質問をどうぞ。

質問者③ はい。西永先生、本日はありがとうございます。私事ですけれども、つい最近、私も結婚させていただきましたので、すごい身につまされる思いがしまして、奥さんのことは気をつけないといけないなと思ひ、いろいろな問題を挙げていただいたんですけども、逆にですね、先生がこれまでごらんになった中で、ジェンダー平等という意

味ですごく見事だなというお寺さんというのは、ありましたでしょうか。例えば、ご主人が僧侶の方で、僧侶でない奥さんがおられる所で、見事に役割分担がされているだとか、両方とも満足度が高そうであるとか、そういったお寺の実例というのは、ございますでしょうか。

西永 まず一つは、女性が住職をされていて、男性が坊守をされているお寺というのがございます。そちらのお寺は、たしか最初は男性が住職をしていて、奥さんである女性が普通に坊守さんをしていたんですが、どういう事情があったのか分からないんですけども、入れ替わって、女性の方が住職になってというふうに数年前になりました。それで最初に説明しましたが、法規上は全然問題なくて、大丈夫なんですけれども、ルール上は決まっていますが、本願寺派内で男性の坊守というのは、本当に数パーセントしかないような状況ですね。やっぱり大多数が女性の中にあつて、男性の坊守さんが活躍されてるという、そのお寺さんは、ジェンダー平等に対して見事だなというふうには思います。

質問者③ それは、お互いが尊敬し合つてるとか、そういう意味でしょうか。

西永 そうですね。お互い尊敬し合つて、助け合つてお仕事をされているなというのも見られますので、素晴らしいと思います。

質問者③ ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。続きまして質問の方、よろしく願います。

質問者④ お時間いただきました。ありがとうございます。西永先生のお話は、私が結構感じていたことをお話ししていただいたので、本当にありがたかったと思います。西永先生も離婚されたということで、私も三、四年前に離婚いたしました。その際に、やはり姓の問題、氏の問題ですね。元妻が、離婚した際に、いろいろと書面等で名字を全て役所等に行つて変えなければいけないというところで、私はほとんどそういった負担が全くなかったので、結局、離婚した後に手続きを手伝うというようなこともありました。そういった時に、確かにここは男性と女性で平等ではないなというのを制度的に感じたことがございました。

質問なんですけれども、私、もう青年会員を卒業してしまつてるんですけれども、若手僧侶の会等で、女性教師の数が絶対数として少ないんですね。私の管区もとても少なく、その際に、「まだそんな初歩的なことを」と思われるかもしれないんですけれども、大きな行事等で集まった際に、着替えの場を設けられる場所と、どうしても設けられないような場所があったりして、そういった際は車で着替えていただいたりとか、そういう方法をとっていたんですけれども、女性教師からの視点として、男性・女性が同時に着替えなきゃいけない場面とか、通常、活動を行っている中で、「こういったところは最低限気をつけてほしいな」というところがあれば、お伺いしたいと思つてご質問させていただきました。

西永 ありがとうございます。まず、姓のことですね。氏のこと。私も本当に大変な思いをしまして、養子縁組をした時に一回名前が変わつて、そのお寺を出た時にもう一回名前が変わつて、離婚した時にもう一回名前が変わつてますので。西永、養子縁組した時の名前、離婚した元夫の名前、西永と、これだけ変わってきましたので、事務手続き

の大変さは身に染みて思いますし、私はそれ以上に、「自分は何者なんだ」みたいな、訳分からなくなるようなアイデンティティーの問題が一番辛かったなというのは思っています。

で、女性の僧侶として、着替えの問題とか、もちろんありますね。例えば、女性たちが集まる会は、なぜか坊守会とかもそうなんですけれども、みんな子連れで来るんですよ。でも、男性たちの会には、誰も子連れで来ないんです。それが当たり前になってしまって、女性の会では最終的に「ベビーシッターつけよう」という話になって、ベビーシッターに来てもらって子供を見てもらうようになりましたが、そこには「女性が子供を見るもの」という固定観念があって、男性の会議には何で誰も連れてくる人いないんだろうとか、女性の会議だけ子供のことでベビーシッター雇ったり、お金使ったり、そこは不平等だなんてすごく感じていました。

後は、これも私がある九州の地方で経験したことですけども、大きな行事とかがあったあとの片付けだったり、例えば、子供の行事みたいなものと同じTシャツ着てっていうのがあったんですけども、そのみんな着たTシャツを、「じゃあ、坊守さん、洗濯よろしくね」って意味が分からないんですけども。「あなたたち、みんな洗濯機あるでしょう」と思いましたが、坊守さんイコール洗濯する人みたいな感じで、なぜか私のところに全部ばーんと持ってこられたっていう、変なジェンダーロールがありました。その時は「今回は私、やりますけれども、今後一切やめてください」と一言言いました。自分で使ったものは自分で洗濯しましょうっていうふうに変えていったんですけども、そういうところですかね。「女性だから、こういうことできるでしょう」っていうような思い込みだとかっていうのは、ちょっと気をつけていたいただきたいなと思っています。

質問者④ ありがとうございます。

司会 チャットから質問をいただいております。「初歩的な質問ですが、坊守さんは、どのような仕事をされているのでしょうか」ということで、先ほどの話のように、お寺の裏方みたいなことですけれども、いわゆるお寺の奥さんということとプラスアルファで言うところがあるかを、もし付け加えることがあれば、お話しいただければと思うんですが。

西永 そうですね。お寺（出張所）の中では、いわゆる坊守さん、寺庭婦人とか、寺族さんとか、いろいろ呼び方がありますけれども、やっつてゐることはほぼ変わらないと思うんです。加えて、別院の行事、例えば、仏教婦人会の別院で行われる行事だったり、別院の大きな宗祖の御命日法要だとか、何日間もやっつて、そこでお弁当がふるまわれるっていうときに、坊守が駆り出されてお弁当をひたすら作るだとか、別院の行事を主に手伝わなければいけないっていうのがプラスされてくるのは、ある九州の教区独特だと思います。

司会 普通のお寺の坊守さんだったら、そういう仕事はなくて、お寺のいわゆる寺庭婦人としての仕事という形になるんですね。

西永 そうですね。

司会 分かりました。

皆さんの質問がたくさんありましたので、いろんなことをお答えいただきました。一応、ここでお時間となりましたので、講演の方を終わらせていただきますと思います。西永先生、本当にありがとうございます。どうぞ今後と

もよろしくお願いいたします。

西永 ありがとうございます。